

第二期 第六十九号 (初版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2022. 04. 20 定有堂書店 発行

記憶を折り畳む

奈良 敏行

キウイと大阪と磯の波と

ワクサカソウヘイ

続ようせい日記

鳥居 貴彦

汽水のほとりから (13)

小原 修治

プーチンは「バック・イン・ザUSSR」を歌っているか萩原俊郎

卒業式をめぐって (二〇二二)

松田 裕史

ディーエックス(α)のいるところ

芝野 浩貴

バナナ日和

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その六十八

内田 克彦

「歌人・杉原一司」三部作の完成

安藤 隆一

八代日記 (二十五)

齊藤 仁昭

ロシアの魂

秦阜 梅林

レターセットと傘

森本 龍哉

春、来たる

三浦 永理

続・蝸

あぎの素生

魔法のない指

ドラマメリア

## 記憶を折り畳む

奈良 敏行

(定有堂 店主)

今日は県民文化会館の駐車場が満員だった。大学の卒業式があったらしい。大学は二つある、どちらだったのだろう？ 夕方、「読む会」のメンバーのH・Mさんが「今日卒業式でした。でも、院に二年残るのでまたよろしくお願います」と挨拶に見えた。鳥取大学の卒業式だった。流体力学の研究をするそうだ。

「読む会」にはもう一人鳥大生がいる。「音信不通」の寄稿者のR・Mさんだ。卒論で「読む会」と本屋のことを書いている。『本がある、人がいる——定有堂教室「読む会」をとおしてみえた世界——』というタイトルだ。卒業後は映像メディアに就職がきまっています、なるほどと思わせるドキュメンタリータッチの論文で、感性豊かに描かれていた。大学でも評価が高かったらしい。

公立鳥取環境大学に入学する早々「音信不通」に寄稿していた、北海道出身のN・Uさんも四年が過ぎた。後半

ほどは残るらしい。卒論は『鳥取県東部の小流域におけるニホンジカ (Cervus Nippon centralis Temminck) の分布が土壌に与える影響』という論文だった。専門的で研究成果の判断はできないが、論文構成のしつかりした理系の研究と感心した。

三月上旬には九州の大学生(二回性)が訪ねてきた。京都の待賢ブックセンターの鳥居さんの紹介だった。コロナ禍でリアル授業が失われ、自力で大学生活を工夫しているそうだ。幸い空き家を貸してくれる人がいて、集会所を兼ねて本屋を営んでいる。本の仕入れは鳥居さんが力添えしている。店内写真を見せてくれたが居心地良さそうな空間だった。

興味を持ったのでいまどんな本を読みますか? と尋ねた。旅の途中訪れた本屋で、こんな本を購入しました、と鞆から取り出して見せてくれた。『かわり方のまなび方』『暇と退屈の倫理学』『ルポ路上生活』『まちがったっていいじゃないか』『続・ゆっくり、いそげ』の五冊だった。最後の本は知らなかった。影山知明著クルミド出版だった。仕事と生き方、それもオルタナティブというつながりだろうか。『暇と退屈の倫理学』はちよつと読み方が分からないとのことだったので、付録の章の「傷と運命―暇と退屈の倫理学」増補新版によせて「を最初に読むといい

ですよと告げた。「サリエンシー」という概念の創出がユニークだからだ。自分で概念を創出し、その概念を説明するというのが面白い。

このT・Nさんは鳥居さんが作ってあげた「本屋のご朱印帳」にサインを求めて旅している。そしてサインをもらったら必ず本を一冊購入するルールらしい。さて定有堂の一冊は? 今だと『つながりの作法』だと思ったが、少し迷い、内沼晋太郎さんの『本の逆襲』をすすめた。「当事者研究」は自分の関心事だが、踏み込み過ぎてはいけなくて本屋つながりにしておいた。旅の「最後にいいことがあるそうです」というので、ここを終点にしてはいけないと、あわてて「ご朱印帳」の行く先を増やし、「汽水空港」と書き加えた。その日のうちに行ったのだが、お休みだったそうだ。

少し前には、ボクサーになりたいけど、仕事と生き方をどう考えたらいいのだろうか? と問いかけた若者がいた。鳥取大学生だった。いずれ転身の時期が必ず来るから、「やり直せる」ということをテーマにしたらいいのではと答えた。そのためには、人のつながりを豊かにしておくのが大事だろう。

今はコロナ禍で学園生活が閉ざされている。でも考えてみれば、わたしたちも大学紛争で学園は閉ざされていた。

それは一つの所与だった。ミニコミを作る。人の集まりを作る。すべてはそこから始まった。それから長い時間が過ぎ、たくさんの人と出会いすれ違った。ほとんど一期一会だが、記憶に刻まれる事柄も多く、その記憶が折り畳まれて今を生きる。仕事と生き方について何一つ正解はいまだに分からない。分からないどころか、今後ますます仕事観・生き方観は変貌する。記憶を折り畳み続ける果てにきつと何かしら良いことがあるのかもしれない。

2022. 03. 25

- 西村佳哲 『かわり方のまなび方』 ちくま文庫 2014  
國友公司 『ルポ路上生活』 KADOKAWA 2021  
森毅 『まちがったっていいじゃないか』 ちくま文庫 1988  
影山知明 『続・ゆっくり、いそげ』 クルミド出版 2018  
國分功一郎 『暇と退屈の倫理学』 新潮文庫 2022  
綾屋紗月 熊谷晋一郎 『つながりの作法』 NHK新書 2010  
内沼晋太郎 『本の逆襲』 朝日出版社 2013

太極拳教室（会場 定有堂二階）葉香クラブ（荷葉）

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

定有堂教室「読む会」（岩田直樹氏 選書）

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

## キウイと大阪と磯の波と

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

パンデミックが始まった頃は「もうこれからの生涯において、旅なんてできないのでは……」などと予感し、暗澹たる気分になっていたものだったが、最近はまだちょこちょこと色んな場所に足を延ばすようになった。来月は福井や沖縄に行く予定だし、今夏はケニアやタンザニアに赴いてヌーの大移動をこの目に焼き付けたいと計画している。

先日は鳥羽を旅した。取材を兼ねての旅行である。

今冬に私は、『磯 ZINE』なる磯のことばかり書いてある怪文冊子を編集制作した。それが予想していた以上にウケたことで調子に乗り、五月に東京で『海の文化祭／磯マーケットフェス（略して磯マ）』というイベントを開催することにした。そこで披露するグッズやネタ作りの下準備のための取材先として、日本屈指の海洋王国である鳥羽へと足を向けたのである。鳥羽の磯は、生と死が濃く入り混じ

る、奇妙なトーンをたたえている。

『鳥羽水族館』や『海の博物館』、そして伊勢湾の岩礁地帯や海女小屋に触れ、非常に充実した海洋旅となった。アテンドしてくれたのは現地に住むグラフィックデザイナー・ダダオ氏。拙著『ふざけながらバイトやめる学港（山下陽光氏との対談本）』の装丁を手掛けてくれた人だ。

ダダオ氏と鳥羽のあちこちを巡りながら、海にまつわる色んな話をした。聞けば最近のダダオ氏の元には、海にまつわる仕事ばかりが流れ着いてくるという。私も『磯フェス』に『磯マ』、その他諸々、気がつけばここ数か月はどうにも海に囚われている節がある。ふたりの一致した見解としては、「海は向こうからやってくる」。好むと好まざるとにおいて、海はある瞬間に、人間を巻き込んでくるものなのかもしれない。引き潮の際に命を持っていかれないよう、鳥羽の海女さんたちが使用している魔除けの紋様「セーマン・ドーマン」がプリントされた手拭いを道中のギフトショップで購入した。

ダダオ氏に別れを告げ、私は鳥羽から大阪へと移動した。構成を担当しているコントライブがグランフロント大阪内の劇場で開催されるからだ。そのライブのタイトルは『変身大阪ウミウシ』。ここでもまた、海が押し寄せてきている。言っておくが、私が決めたタイトルではない。

そのコントライブの本番の日、午前中に空き時間があつたので、天王寺動物園へと遊びに出かけた。私はこの動物園のファンなのだが、パンデミックのせいで、およそ三年ぶりの訪問となつてしまった。

天王寺動物園の目玉は、ニュージールランドの奇鳥、キウイである。翼がほぼ完全に退化している、飛べない鳥。日本で飼育しているのは、ここの動物園だけである。

このキウイ、けっこうスター性を秘めているというのに、地元民である大阪の人たちは天王寺動物園にそれが展示されているという事実すら知らなかったりする。それもそのはずで、キウイは夜行性の鳥。暗い室内で飼育されているため、よつほど目を凝らさないかぎり、来園者はその姿を確認することはできないのである（暗すぎて『キウイ』の表示すら見えなかったりする）。実際、私もちゃんと姿を拝めたことはない。

ところが今回、久々に訪れてみたら、ギフトショップではキウイのぬいぐるみが一押しグッズとして華やかに展開されていた。おお、いつの間にこんなに知名度を得たのだ。スタッフの人に聞いてみたところ、どうやらそれはスマホの進化と関係がありそうなんです、との答え。どういうことか。スマホのカメラは日々進化しており、いまでは人間の目よりもナイトモードのほうが闇夜を見渡せる、と

言われているほど。で、ようやくキウイも来園者のスマホカメラによつて、その姿を確認されるようになった。かわいい、かわいい、え、キウイって超かわいいじゃん。こうして日陰者だったキウイは、やつと日の目を浴びることとなったのだ。テクノロジーとキウイとの間に、まさかそんな因縁が生まれていたとは。

私はキウイのぬいぐるみを買ひ、コントライブの会場で午後の仕事に従事した。翌日、大阪市の弁天町にある書店で拙著の直売会があり、書籍を並べた机の傍らにそのキウイを置いた。そしたら目玉商品の『磯田』よりも、数年前に上梓した『ヤバイ鳥』という凶鑑のほうが、よく売れた。

潮は寄せ、そして引いてゆき、こんどはまた鳥の世界へと導かれているのかもしれない。

# 続よっせい日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

二月八日の続き。夜、オンラインイベント「おもしろさうし研究会」。いつもの和やかな時間。ひとときコロナのことを忘れる。オンラインでのイベントはここ二年で一気に浸透したけど、代わりに何かを絶滅させた気がする。イベントとは何か。終了後、妻と今後のことを話す。妻は何軒か病院に電話してくれていた。どこも断られたらしい。結論はでない。とにかくわかったことは、行政は助けてくれないこと。規則正しく、免疫高めて暮らすしかないこと。妻と子が寝たあと、ダメもとで相談センターにかけてみる。話し中。二十五回くらい鳴らしたら急につながった。大学生のような声の女性。事情を話すも「医療機関を受診してください」と繰り返すだけ。「こちらから病院は紹介できません。地域を広げて探してもらえますか」と言うので、京都中の病院にかけろってことですか、と聞いてみる。「そ

れは…そうっすねえ」言葉遣いや反応が若い。こんな夜中にコールセンターで働く若者に三十過ぎたおっさんが声を荒立てるほどダサイことはない。冷静に話を聞く。受診したら保健所に通知が行くので、そうしてください、と言う。ははん。結果が出ているのにさらに受診しろと言うのは行政の都合だけではないのか、受診のために出歩くことが他の人に感染させるリスクではないのか、保健所に通知がいったところでその後はどうなるのか、いろいろ聞いてみる。保留音がなり、しばらく待たされる。保留音がとぎれ、上司と話している途中の声が聞こえてくる。「一度こちらから折り返しますね」と言われ電話は切れた。風呂に入ろうとしていると、すぐに電話が鳴った。さっきの女性。「こちらから病院を受診しなくていいと言うことは申し上げられません」「どうしても受診したくないとおっしゃるなら…」などと言う。ちよつと待ってください、受診したくないんじゃないんでできる病院がないんで困ってるんです、あと最初に受けた検査が保健所と連携してないというのがよくわかりません、と伝える。急に電話の相手が代わった。なぜかカタコトの日本語を話す。中国系の人だろうか。「カクニケンサはウケテモラウ必要がアリマス」。またか…、ため息。と、電話の主が続ける。「なぜ検査を受ケマシタカ？ 感染の不安がアツタカラ、デスネ。デハ、保健所と

提携シテイル無症状の方のタメノ検査会場、アリマス。アト、保健所に直接連絡をトツテモラウ窓口もアリマス。」え、どこですか。クリニックの名前と京都市のサイトを教えてもらいメモ。電話が切れた。なんだったんだ。脱力。寝よ。

二月九日。病院を探すか、もう一度別の会場で検査を受けるか。単純なことだがどっちもやる気が出ない。昨夜聞いた保健所の窓口は当たり前のように話し中だった。隔離期間などダラダラと調べる。休業の補償も。雇われている人は有給の代わりになる制度があるらしい。だが妻の会社はまず有給をとって、使い切ったらその制度を使えという方針だという。有給を使い切ってからコロナ以外の何かがあったらどうするのだろう。個人事業主にも補償がある。ただ、「委託を受けて個人で仕事をする方向け」とか書いてある。誰かから頼まれて本屋をやっているわけではない。対象外。もう一つは小売店の売り上げ減少に対する補償。これなら、と思うが「自主的な休業により…売り上げが減少している場合は対象外です」とか書いてある。自主的、とは。自分が陽性で人にうつす可能性があるなら店は開けない。でもそれは自主的なの？ 役所言葉はわからない。

二月十日。保育園から連絡。状況どうですか？ と。病院が見つからないことなど話す。保育園の園医を紹介してもらおう。以前電話して話し中だったので諦めていた。もう一度かけてみる。保育園からの紹介で、と前置きして状況を説明する。「一度きてもらいましようか」。え、いいんですか。三十分後に行くことになった。徒歩五分のところにある小さな病院はドアが開けっ放しで無人だった。すいませーん、と声をかけるとおばあちゃんの先生が出てきた。防護服とフェイスシールド、マスク、曲がった腰。「どうぞ」奥に通される。「あなたその咳はいつから出てるの？」と聞かれ数年前からずっと寒くなると乾いた咳が出ることを話す。「コロナよりもそっちが心配ね。咳止め出します。落ち着いたらもう一度来てね。レントゲンとりましょう。陽性の届けは保健所に出しておきます。連絡は来ないかもしれないわね、今忙しそうだから。」あっけなく診断終わり。「お金はいらないの」と帰される。ぼかん。

いつまでつづくのか？

「開風社 待賢ブックセンター」

# 汽水のほとりから (13)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

「明日までに以前お伝えしたICT教員研修の動画を視聴しておいてください」。朝礼で教頭がマイクを片手に職員に一斉連絡する。ICTとは、要はインターネットのような情報通信技術を利用したサービスのことだ。これを全ての授業に導入せよというのが文科省の推進しているGIGA(ギガ)スクール構想で、それが高校でも新年度から始まるので、しっかりと研修せよとのお達しである。

最近知ったが、GIGAスクール構想のGIGAとは、Global and Innovation Gateway for Allの略で、「全ての児童・生徒にグローバルで革新的な扉を」と訳すらしい。今から三年前、この構想の立ち上げに際して出された当時の文科大臣のメッセージ、『子供たち一人ひとりに個別最適化され、創造性を育む教育ICT環境の実現に向けて』では、全ての児童生徒に一人一台の学習用端末を配備し、

高速大容量の通信ネットワークの一体的な整備を進めることを約束し、その環境を手段として「子供たちが変化を前向きに受け止め、豊かな創造性を備え、持続可能な社会の創り手として、予測不可能な未来社会を自立的に生き、社会の形成に参画するための資質・能力を一層確実に育成していくことが必要です」と、その意義を表明している。が、以下で述べるように、この構想の推進には疑問が残る。

そもそも一人一台の端末の配備はコロナ禍で前倒しとなり、現場は対応に追われている。加えて高校では新年度入学生より新学習指導要領が実施される。教科によっては新科目が設置され、教科書も大幅に変わるので、GIGAスクール構想と同時並行的に対処するには負担が伴う。しかも、両者は一見リンクしているようで、そうではない。新学習指導要領の告示は平成三十年三月であり、GIGAスクール構想立ち上げの一年九ヶ月も以前のことである。つまり新学習指導要領は、GIGAスクール構想を念頭に作成されたものではない。一方、GIGAスクール構想も、財界や産業界の要請に応じて政府が掲げた国家成長戦略を背景とするものであり、文科省主導の新学習指導要領に沿って考えられたものではない。両者は本来、別物なのだ。

先述のGIGAスクール構想の文科大臣メッセージは、『Society 5.0 時代に生きる子供たちにとって、PC端



末は鉛筆やノートと並ぶマストアイテムです」と始まるが、そこに見える「Society 5.0」は、GIGAスクール構想の背景にある国家戦略である。振り返れば、文科省は将来の指針を定めた新学習指導要領を告示した三ヶ月後、突然のように「Society 5.0に向けた人材育成く社会が変わる、学びが変わる」という文書を提出した。そこには新学習指導要領の主軸であった「主体的・対話的で深い学び」に代わり、「個別最適化された学び」に重点が置かれている。「個別最適化」の語は先述の文科大臣メッセージの表題にも使用されているが、要するに、この文書のコンセプトはGIGAスクール構想のそれと基本的に同じものである。

ちなみに内閣府のHPによれば、「Society 5.0」とは、「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会」のことだとされる。なお、これに関連して先の文科省の文書が出た同年同月には経産省でも『『未来の教室』とEdTech研究会』の第一次提言を発表している。「EdTech（エドテック）」とは「Education（教育）とTechnology（技術）から成る造語で、簡単に言えば将来の産業界を担う理系「人材」を育成する教育活動のことで、文科省の文書にも登場する。また、総務省でも、自治体と連携し、全国の学校のICT

環境の整備に尽力し、一人一台の端末の配備に貢献した。こうした省庁を超えた一連の動きは、「Society 5.0」という国家成長戦略が背景にあったればこそだと言えよう。ともあれ、一人一台の端末の配備はそれでいいとして、一方の高速大容量の通信ネットワークの整備については、その全てを外資系民間企業に委ねるといって、とんでもないことになっている。冒頭で触れた、職場のICT教員研修の視聴動画は、なんと約一時間にわたって全篇グーグルの商品が紹介され、それらが如何にGIGAスクール構想に役立つかというPR動画になっていた。グーグルは、今回プラットフォームとなったことで、膨大な生徒の個人データを手でできる立場を得た。これが如何に危険なことかは、国際ジャーナリストの堤未果が昨年上梓した『デジタル・ファシズム』（NHK出版新書）で指摘した通りだろう。彼女が言うように、デジタル庁に権限を集中させるべく、デジタル改革関連法が成立した結果、個人情報保護条例が無力化した現在では尚更だ。このまま推進して大丈夫か。

GIGAがGoogle and Industry Gateway For Allの略であってはなるまい。生徒は「データでも「人材」でもない。

## プーチンは「バック・イン・ザUSSR」

### を歌っているか

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

この一カ月というもの、ウクライナ情勢から目が離せない。やれ「ウクライナが気になって仕事が手につかない」だの、「ウクライナの人たちの苦しみを思うと毎晩、酒を飲まずにいられない」などと屁理屈を並べて、カミさんの不興を買っている。

中高校生のころ、ロシア文学およびロシア映画にずいぶんはまったことがある。ロシア文学といっても、あのドストエフスキーやトルストイなどの大長編小説ではなく、プーシキンの『エウゲーニイ・オネーギン』ガルシンの『紅い花』チエーホフの『六号病棟』といった、大半が短編で、中高校生でも買える岩波文庫が多かったせいもある。

◇

◇

◇

十九世紀のロシア文学には「余計者の文学」という系譜

があつて、それが先に挙げた小説群だ（こんなものを読み耽ったせいで高校時代に不登校になったのだろう）。

教養や知性、青臭い正義感ゆえに世間になじめず、身を持って余す青年貴族やインテリ層。ガルシンの『紅い花』の、精神病院の庭に咲く深紅の花を悪の化身と信じ、孤独な戦いを挑む青年。チエーホフの『六号病棟』では、患者の中に哲学論を交わせる知的な青年を見つけた精神病院の院長が、やがて周囲から精神病を疑われ、逆に病棟に押し込まれる。どちらも出口の見えないロシア社会の後進性、閉鎖性に苦しむインテリを描いたものだ。

『六号病棟』を読んだレーニンは「これはロシアの現実そのものだ」と打ちのめされ、妻クルプスカヤに手を引かれ、夜の散歩に出たという逸話が残っている。

◇

◇

◇

一方、同じく中高生の時に観たロシア映画の主人公たちは、こうした小説とはまた別のロシアに生きていた。

『誓いの休暇』（1959年、グリゴリー・チュフライ監督）は、独ソ戦で敵戦車を撃破して特別休暇を与えられた少年兵が母の待つ故郷に向かうが、さまざまな出来事やトラブルに巻き込まれ、母に会えたのはほんの一瞬。再び戦場に戻った息子を母は広大な麦畑のあなたを眺めながら待ち続けるが、彼が帰ることはなかった。『人間の運

命』（同年、セルゲイ・ボンダルク監督）は、独軍の捕虜になった男が命からがら脱出したが、家族は空襲で全員死亡。トラック運転手になった男は道端で戦災孤児を見つけ、わが子として育てることで生きる気概を取り戻す。

どちらもフルシチョフの「雪解け時代」の映画。スターリン時代と違い、戦争の悲劇や負の側面が描かれているが、それにしても、ロシアの庶民大衆というのは、見渡す限りの凍てつく大地でどうしてこうも黙々と働き、辛酸の末に死んでいくのか、と感じた。今のキエフ攻防を連想させる英米独合作映画『スターリングラード』（2001年、ジャン・ジャック・アノー監督）では、敵の反撃に後退する味方兵士を「脱走兵」と見なして後方から機関銃で撃つソ連軍が描かれている。日本軍同様、「兵士の代わりはいくらでもいる」というのがこの国の軍隊の伝統。それはウクライナ侵攻を見ても分かる。



「今のロシアで『プーチンの戦争』に反対なのは都市部の知識人や技術者、若者ら少数で、大半は国営テレビしか見ない中高年層、地方の住民を中心に賛成」という報道を見るにつけ、小説に出てくる「余計者のインテリや若者」と、映画で描かれた「もの言わぬ庶民大衆」という古くからの二極構造はまだ生きているのだ、と感じる。

一方、いち早く「関の声」を上げた若者や知識人は抑え込めても、もの言わぬはずの庶民がある日「関の声」に応じて反旗を翻し、権力者を失脚させたのも、ロシアやその周辺国で何度も繰り返されてきたパターンである。



ポール・マッカートニーは2003年に赤の広場でライブを行い、一曲目に「バック・イン・ザUSSR」を歌ったが、プーチン大統領が遅れて来たのでアンコールでもう一度、この曲を歌った。「ソ連に戻れてほんと、ほっとするよ。ウクライナの娘はかわいいし、モスクワの娘に僕は歌う、『わが心のジョージア（グルジア）をね』（意識）。

ライブ後、クレムリンを訪ねたポールにプーチンは「あの時代、ビートルズは世界を知るための窓のような存在だった」と告げた。プーチン青年はソ連では禁じられていたビートルズの音楽をひそかに聴いていたのだ。

さて皮肉にも「世界を知る窓」を国民からすべて奪ったプーチンは、今もこの曲をひそかに歌っているだろうか？「ソ連時代に戻れてほんと、ほっとするよ」と。

## 卒業式をめぐって (二〇二二)

松田 裕史

(高校教員)

卒業式と東日本大震災は僕の中で分かちがたく結びついている。八年前、福島から自主避難をしてきた生徒の卒業になんとかこぎつけた。こぎつけた、というのはどうしても欠席が多くなりがちで卒業に必要な単位修得に影響が出ていたからだ(仮に、規定を超える欠席率でも事情が事情ゆえ、超法規的に卒業は認められていただろうが)。縁もゆかりもない鳥取の地で高校を卒業し、役者になる夢を叶えるために神戸に旅立つ彼を取材するため、卒業式の日にはNHKのカメラが彼に張り付いた。卒業式、そしてその後の最後のホームルームでもカメラは回り続けた。卒業式後のホームルームが公共の電波で流される機会は、あれが最初で最後だと思う。八年前のその時に生徒に語っている同じメッセージを、今回も期せずして語っている自分に三月一日の夜、眠りに落ちる前にふと気づいた。

二月二十八日(月)は三年生にとって久々の登校日だった。一月の中旬以降、一堂に会することが避けられていたため

配布物、返却物が大量にある。二八日の朝に仕分けてもいいのだが、かなりごった返すことが予想され、そうなること焦りで何か忘れるが僕の定石だ。その回避と、一日の最後のロングホームルームの準備をするため二七日(日)の昼前、学校に出向いた。

部活も禁止されていたため学校は閑散としていた。しかし、三階の自分の教室に近づくにつれ、四階から何かの音が漏れ聞こえてきた。別の先生がホームルームのリハをさせているらしい。よく耳を澄ますと、マライアキャリーのHero が流れている。おそらく、卒業証書を手渡す時などにBGMとして使われるのだろう。Hero は僕も好きな楽曲だ。大学一年の時、リスニングのトレーニングで使われた時に初めて聞いた。ただし、自分のクラスに流すには歌詞の内容が合わないと感じた。自分の中をじっと見つめればヒーローはそこにいるという内容で、言うなれば個の強さの再発見がテーマだ。実にアメリカ的な楽曲である。それとはともかく、手の込んだことはしない性質なのでBGMの用意は考えてなかったが、触発されて何か流そうかという気になった。洋楽もいいが、クラシックもいいかと思ひ、乏しいデータベースからショパンのバラード第4番がヒットする(だが、当日の教室の雰囲気にはフィットせず、結局、使用する必要はなかった)。

三月一日。木の芽起こしの雨は前日までに降りやんでいて朝から快晴。道ばたの緑ハコベも白い花を覗かせていた。職場に着き、コーヒーマーカーに粉と水をセットしコーヒーが出来上がるのを待っている間、誰もいない教室へ足を踏み入れる。他の教室にもまだ誰も来ていない。生徒のいない教室に行つて何の意味があるかと言われても上手く答えられないが、何年も前から習慣になつてのことだ。掲示物の乱れを直したり、不要なプリントを回収したり、パソコンを立ち上げておいたりする。夏と冬にはエアコンを稼働させておく。放課後の教室に向き、生徒机の整頓をされる先生をこれまで二人知っている。若い頃はそれにどんな意味があるのか思い至らなかったが、今では何となく分かる。

式は予定通り、一時間程度で終わった。ホームルームで卒業証書や卒業記念品を一人一人に配る。全員に一言、喋る機会を与えたいところだが、喋りたくない生徒もいることだろうし、今回はやめた。代わりに、代表者四人に思いを語ってもらう。最後の一人は歌で思いを伝えたいということ。スマホで音を流しながら流行りの歌を歌っていた。担任である僕の番になった。八年前は福島から来た生徒のことを思い、和合亮一、黒田三郎、石田瑞穂の詩を紹介したが、今回はそれらを使うのは唐突な感じがしたのでやめた。

偉人の名言など、何か確実に、気の利いたことを伝えたいと思いつながら、それは本当に伝わるのか不安になる。そして、本当は何を伝えたかったのかも不透明になり、伝わるものが伝わればよいかと開き直る。とりあえず、*Volatility* : 不確実性 *Uncertainty* : 不確実性 *Complexity* : 複数性 *Ambiguity* : 曖昧性) の時代であることは最近いろんな場面でよく話すが、もう一度言っておいた。それから、「逆境をこそ愛せ」というかつて教わったメッセージも送つたが、正直に言えば十全にこの言葉を実行できているわけではないことも伝えた。十三時前、すべて終り、誰もいなくなった教室全体を見渡していると、今回は紹介しなかった石田瑞穂の一篇の詩『まどろみの島』(より) が再び僕の中で呼び覚まされた。

「私は あなたに ただ一通の

長い 長い 手紙を

贈りたかったのかもしれない

新緑の葉むらを宝石のように滑りおりて

去年の枯葉のうえにとどまる光

そんなふうに 綴られる手紙を」

これからは音信不通となるが、彼ら／彼女らを包摂する柔らかな光が降りそそいでくれればと願う。

# ディーエックス(Dx)の「る」

芝野 浩貴

(地球探家)

リーマンという言葉は、多くの人にとってはリーマンショック(2008年)から馴染んできただろうし、略語でいうなら、1990年代からサラリーマンのことをリーマンとして揶揄して使っていたのでいざれにしてもいいイメージはないと思う。

(英語では「salariedman」は「wageworker」への対になり、階級的意識が伴うため「office worker」など具体的職業として使われる)

しかし、数学家は、「リーマン積分」や「リーマン予想」に慣れ親しんでるので、数学者リーマンの方を思い起こすだろう。リーマン積分を高校生に説明する時、「面積は $\int f(x) dx$ と表すと伝える。その時の $dx$ の説明が難しい。 $dx$ は0ではないので存在はするが、どれくらい長さなのかを言及できないからである。画家カンディンスキーの力でも借りたいところだ。(点と線と面)そんなところに近年、 $Dx$ なる言葉が幅を利かせてきて、またもや数学用語が打ち消されようとしている。デラックスくらいの形容詞なら流せるが、デジタルトランスフォーメーションの略として「 $Dx$ 人材の開発に乗り遅れると企業は潰れる」という文脈であらゆるところで目にす

ることになった。

『サラ金の歴史』(新書大賞)だけでなく数学史も学ばれたい。本家本元の $dx$ は微分積分から発祥しており、その記号の歴史も $\Delta$ ドット(ニュートン) $\rightarrow d\dot{x}$  $\rightarrow dx$ (ライプニッツ) $\rightarrow \delta$ (ラグランジュ) $\rightarrow D_x$ (コーシー)と続いたのだが、 $D_x$ は $Dx$ に上書きされた。かろうじて $dx$ の方は小文字として差異化されるが、リスニングとしてはディーエックスだから、聴覚の世界では乗っ取られた。

リーマン論文集の翻訳は2004年に朝倉書店から出版されている。それはガウス(1995年)、アーベル・ガロア(1998年)論文集の翻訳の後だから、後塵を拝するかと思うが、同一の訳者なので恐れ入る。数学者高瀬正仁氏のことである。高瀬氏は数学家でもある。私は勝手に「佐々木力・高瀬正仁・山下純一・三浦伸夫」を数学史四天王として私淑してきた。佐々木氏は2020年に亡くなったが、残りの3名はご存命で現在も数学雑誌「現代数学」などに寄稿し続けておられる。

本号では、高瀬正仁氏について少しだけ述べたい。私が司書をしている時、名著「 $dx$ と $dy$ の解析学」(日本評論社、2000年)が出版された。(もちろん、県立図書館には所蔵有) $dx$ と $dy$ を分けていいのか? 分数のように使っていいのか? につ

いてのモヤモヤを払拭する内容であった。それから十数年の月日を経て「ガウスの数学日記」（日本評論社、2013年）が出版された折に直接高瀬氏から話を伺った。

「」はその時の備忘録の一部

「父は国語の先生、リーマンと岡潔の研究がライフワーク、古代ギリシャの作図問題は曲線を使う、デカルトの幾何学は作図を代数化する、デカルトの思想はガウスにも生きている、方程式から曲線を描くのに接線を引いて考えた、フェルマーはライプニッツに近づく、デカルトとフェルマーの書簡には深い場所に秘められた曲線がある、デカルトは、曲線と方程式ならオイラーは、変化量と直線、の関係研究、ニュートンの流率法に対するオイラーの無限解析、オイラーからコーシーにうつる間に、 $\pi$ と $e$ が分離できなくなった」

岡潔研究の成果についてはここでは述べないが、(8号・2号)高瀬氏の卓越なる史料蒐集力と分析能力は現在、中勘助に注がれている。新刊が待ち望まれる。

DXの目的は「デジタル技術を浸透させて生活をよりよいものへと変革すること」だという。DXは大きく分けて、デジタルイゼーション(デジタル化)とデジタルライゼーション(デジタルデータの活用)の二つある。かつては点の集合としてのデータだけだったのが、ビッグデータの利用が可能となり、デー

タの活用もデータ化でき、線として面として多層構造を成す。

岡潔は、数学をへ自らの情緒を外に表現する学問芸術だと称した。最近観た映画では、『名付けようのない踊り』がその精神を受け継いでいると感じた。舞踊家田中泯は、鍛えた体のダンスとは異なる「場踊り」で世界を逍遥している。正から斜めになる時に観客が入り込める。(DXの身体化)「見ることがダンス」になると。人間を踊るのでなく生命を踊っていた。居着がない。「はっきりとしたDX」がダンスなら、「名付けようのない幅を持たない $\pi$ 」の集積「が場踊り」だと感じた。ベルクソンは「偉大な発見は純粹持続の海原に投げ込むことで現れる」と言うが、変化量の変化の背景に時間の考察は避けられない。接線から微分係数でなく、微分係数が接線を規定するとして、既知の変化量から新たな変化量を構成する手続きを明示する無限小解析をライプニッツが行ったのは「曲線を理解したい」という固有の熱情に支えられていたからだ。その時、高瀬氏はこう言われた。

「ニュートンよりライプニッツだね」

世界を破壊する似非武道家に「数学的武道思考」として「 $\pi$ 」からの逆襲「を伝える。

「丹田はそういう時に使うのではないんだよ」

# バナナ日和

## ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

南洋へバナナを食ひにゆきたいとおもふ(夢二)

リンゴの季節が終わった。

珍しく、大玉で色艶の良い二個。バックを見つけたと思ったら、彼岸のお供え用だった。九百八十円だ。

バナナは、これからが旬である。熱い土地の果物は、暑い時期に食するに限る。「寒」の食べ物だもの。

当節、バナナは年中並んでいるが、寒冷期のバナナほど不味いものではありません。固くて青臭い。追熟ができないのですな。

色々調べて、リンゴの袋に放り込んだり、風呂の湯に漬けたり、レンジで温めてみたりしたが、どれも今ひとつふたつみっつ。諸々試して、結局落ち着いたのが、オイルヒーター(蛇腹式)の、所謂セントラルヒーティングタイプのも

の)の上に載っけておくこと。もちろん、バナナ・ハンガーに吊るして、ですが。

これが、なかなか具合がよろしい。一晩でダメなら、二晩三晩続ければよい。頑固な青バナナもいい感じに熟れる。

それにしても、バナナの銘柄が多くなりましたね。ここ十年くらいでしょうか。初めて「スウィーティオ」というのが出て、かつての台湾バナナ並の甘さに驚いたが、何の、今や「スーパースウィーティオ」だの「極撰」だの「甘熟王」だの「金の房」だの、もう何が何やら。

ブランドも、スミフルやDoleが殆どで、昔ながらのデルモンテやチキータは、この辺りでは余り見なくなつた。

昭和三、四十年代は、バナナといえば台湾産と決まっていた。寸詰まりで皮に角がなくて丸っこい。そして、何より甘かった。フィリピン産も出回っていたけれど、大振りな分、知恵が回り兼ねたか大味で、子供には不人気だった。

思い出すのが、明治生まれの祖父が、何故か「バナナ」と言わず、「バナ」と呼んでいたことである。年寄にありがちな、中途半端に覚えてしまったためか、或いは「フイリッピン」や「につくわじへん」のような謎の発音か、



くらいに思っていたのだが、最近になって「バナちゃん節」という歌があることを知った。

終戦直後に流行った、香具師がバナナの叩き売りをする時の歌であったとか。発信源は門司。

当時、輸送船の冷蔵技術が未熟であったために、皮が青いまま実が柔らかくなる不良品が沢山出た。

そこで、中継地の門司で下ろし、叩き売り（安売り）をしたものであるらしい。「買ったよお客よ何残す、バナちゃん喰ろうて皮残す」といった口上と共に歌ったそうで、「見上げたもんだよ屋根屋のフンドシ」式の、渥美清や小沢昭一的世界を彷彿させる光景である。

しかし、鳥取くんだりまで、叩き売りが回って来たものかどうか。若い時分に住んでいた大阪で仕入れた可能性はあるものの、やはり、戦前の表記「バナ」の「ゝ」を読み飛ばした、という辺りが妥当な所かもしれない。

そう言えば、宮沢賢治の作品にバナナン大将という人物が出てくるのがある。こっちは、一字多いけど。

バナナ文学と言うジャンルがあるのかどうか、寡聞にして知らないが、獅子文六が『バナナ』という長編を書いており、内田百閒の「特別阿房列車」には、一等車の車内販

売がバナナを売って歩くエピソードがある。ミステリには、カーやブラウンや角田喜久雄など、少なからずバナナネタが存在する。

事の序でに、中学の社会科教師（予科練帰りの噂があった）が、授業中によく歌っていた「轟沈」の歌詞に「可愛い魚雷と一緒に積んだ青いバナナも黄色く熟れた」という一節があった。

この先生、退職後の望みは、南の島に土地を買い、家の裏にバナナの樹を一本植えて、安穩に暮らしたい、というもので、なるほど、バナナというのは、年中収穫できて、食いつぶぐれがない。栄養はあり、腹持ちは良し、整腸作用や解毒・解熱作用もあって、血圧を下げる効能もあるというオールマイティな食べ物である。

食べ方も、日本は、ほぼ生食オンリーだが、栽培地では、煮たり焼いたり揚げたり焙ったり潰したりと、誠に様々。主食にしている所もあるというから、件の社会科先生、チャランポランなようで、なかなか慧眼の士だった。

# 鳥取あれこれ その六十八

内田 克彦

(地域研究家)

幕末に活躍した「安場（やすば）敬之丞」について、去る二月六日に、鳥取民俗懇話会二月例会で、郷土史家大田勝也氏による発表があった。

西洋流兵学と砲術を体得していた安場については、『鳥取県史第3巻 近世政治』に、浜坂傍示への野戦御台場二か所築造について築造御用懸に命じられた、と書くほか、『同第5巻 近世文化産業』に四頁にわたって詳しく書かれている。

しかしながら、「どのようにしてオランダ語を習得したか、また洋式兵学を誰に就いて学ぶようになったのかは、明らかでない」とし、「幕府軍制に深く関与することのあった安場敬之丞は、幕府に通じているかもしれないという嫌疑をかけられて、藩の公務を解任されたものと推定される。」  
「最も活動すべき戦乱戊辰戦争期に、『家譜』の記事は空白となっているのである。その空白の中に、激しい時代の変転に翻弄された一人の西洋流兵学者の悲運を見ることができるといえよう。」としている。

この『県史』を執筆した濱崎洋三は、『伝えたいこと』

(定有堂書店刊)の中で、「歴史書としての県史の中では、上記引用文「としか、私は記述できなかった。」として、次のように続けている。

内心は、短い期間でしか意味を持たない政治的判断が一人の有為な少壮の翻訳家を死に追いやった事情を推察しながら、描きたかったのである。

安場の生涯は実際のところはどうかだろう。今回の大田氏の発表は、『控帳』『江戸家老日記』などを調べ、安場の足跡を過不足なく追ったものであった。

安場は、一八二八(文政一一)年、鈴置家に生まれ、学館教授助に就いた後、一八五三(嘉永六)年に安場家の家統養子となる。翌年に佐久間象山の所での三か年の家業修行を許され、江戸に赴いたが、象山は吉田松陰密航事件に絡んで入獄・蟄居となったため、勝麟太郎方で修行、しかも日々の通いは不便のため勝方へ引越しするのである。

そして、一八五五(安政二)年八月、勝が長崎に行くため、安場も同道することになる。

ネット上から、『鳳凰丸昇平丸御軍艦諸記事について』を表題とする和綴手書本の翻刻文が検索され、その中の

「長崎表江為伝習被差遣昇平丸船中乗組之面々御名前」として、「勝麟太郎内侍」の所に挙がった八名の中に、「安場敬之助（ママ）」の名があった。

安場は、長崎伝習所の一期生となるのであり、残留した勝を置いて伝習を終えた一期生が江戸に向けて陸路・海路で出発したのは一八五七（安政四）年の二月・三月であるが、安場は前年の一二月には国許に帰っている。大田氏は、この間に『散兵定則』（この翻訳刊行が「散兵」の語の使用定着化のきっかけとなった）及び『練卒定則』の翻訳を行ったのではないだろうか、としている。

そして、一八五七（安政四）年四月、再び勝塾に入塾、翌年四月には塾頭となっている。

さて、一九七四年の大河ドラマは『勝海舟』であった。主役が渡哲也から松方弘樹へ途中交代したとか、ファンであった同年の仁科明子が出演していたとかの記憶が残るが、調べてみても、安場は登場していなかった。原作の子母澤寛『勝海舟』を探しても、出て来ない。この著の中に、因州藩士で名前の出て来る人物は、千葉十（ママ）太郎、黒木小太郎、岡田星之助、中井範五郎だけであり、他に見つからなかった。その代わり、荘内出身の佐藤与之助が頻

繁に出て来るし、赤松小三郎にも触れてあった。因みに、この両人は、「勝麟太郎内侍」の八人の中に、安場と並んでそれぞれ名が挙がっている（但し、赤松は「赤松清五郎」という名である）。

なお、佐藤与之助は、大河ドラマ『勝海舟』にも登場しているし、二〇一〇年の大河ドラマ『龍馬伝』でも、有蘭芳記という俳優が「勝塾塾頭」として演じている。

さて、その後の安場の動きは、勝と連動する。安場は、勝が一八五九（安政六）年正月明けに長崎から帰り、早速、軍艦操練所教授方頭取に就いた後の九月に、「築地御軍艦操練所」での修行を願ひ出、許されている。

さらに、安場は、勝が翌一八六〇（万延元年）年正月明けから咸臨丸で渡米した後、同年三月に「御雇となり、御側御用人支配を仰せ付けられ」、四月には「表御用人支配を仰せ付けられる」。

続いて、安場は、勝が一八六二（文久二年）年七月に軍艦操練所頭取に就く前の四月に、軍艦奉行から「御軍艦操練所翻訳方」出役の要請が来たことにより、八月に御用番板倉周防守「老中板倉勝静（かつきよ）」のことより、同方出役を申し渡されている。

（以下、続く）

# 「歌人・杉原一司」三部作の完成

安藤 隆一

(杉原一司歌集刊行会)

『杉原一司 塚本邦雄 往復書簡』(非売品)が田中仁・岡村知子・松本陽子編集により鳥取大学地域学部から翻刻・刊行された。一昨年の『杉原一司歌集』(同刊行会)、昨年の『杉原一司宛前川佐美雄書簡』(鳥取大学地域学部)と合わせて、三部作の完成である。

思い起こせば、二〇〇七年の事であった。当時健在であった私の叔母杉原令子(一司の妻)を友人の内田克彦君と尋ね、一司の関係資料(塚本邦雄からの書簡を含む)を見せてもらったことから始まった。

この時、内田君は県の八頭郡地域を振興する仕事のトップをしており、埋もれた「地域の優れた文学者」としての杉原一司の顕彰を企んでいた。しかし、それは、令子の「一司のことはそっとしてほしい」という願いから拒否された。(私も、歌集刊行の過程で、その願いの意味は理解できるようにになったが・・・)

令子が亡くなり、その資料は息子の杉原ほさき(私の同年の従兄弟)に引き継がれ公開されることになった。彼が2歳になる前に一司は亡くなっており、父の記憶は殆どないという。ただ、「親父は、凄い歌詠みだった」と、彼が幼いころに私に話したことを記憶している。ほさきは引き継いだ資料を公開して、それが研究され「どのように、凄いのか」を知りたいことを望んだのかもしれない。

歌人の塚本邦雄は、戦後の前衛短歌運動の旗手の一人であり、一司とは盟友であると言われている。そして、塚本は一司を次のように評している。

「十年、二十年先の定型詩の方向を指し、その修辭学の理想を考え、言語の海におぼれようとする私を励まし導いてくれた。戦後前衛短歌の隠れたリーダーの一人として、私は顕彰し続けてきた。私の作品のバックボーンを作り上げてきたのは彼である。」(塚本邦雄「出あいの風景」朝日新聞 1995. 1. 27)

こうしたことから、一司が「歌論」を、塚本が「短歌」をと、役割分担をしていたと言われてきた。しかし、これは塚本からの発言を基になされたものであり、往復書簡などの残された資料等から実証される必要があった。

内田君は、岩手県北上市にある日本現代詩歌文学館において二〇一六年に「塚本邦雄展」が開催され、その中で塚本家から「塚本苑の一司書簡」が同文学館に寄贈されていることを知る。塚本と一司の書簡を合わせて往復書簡を製作すれば、二人の関係についての重要な一次資料となり、戦後短歌を研究する上で、重要な文献となると考えた。そして、鳥取大学の文学研究者である岡村知子准教授と知り合い、「杉原一司」の研究を依頼する。

また、私も、鳥取大学を数年前に退職し名誉教授となっていた田中仁君（文学研究者）を誘った。彼は中学・高校時代の同級生で、高校の短歌部の部長をしていた。田中君に岡村准教授の友人の松本陽子さんを加え、とりあえずこのチームで書簡の翻刻に取り組むことになった。

私は、翻刻された原稿を全国的な出版社から出したいと定有堂の奈良さんに相談した。一司がどんな人物かを説明する過程で、「まず一司の歌集を出したらどうか」と提案を受けた。確かに、「一司は、塚本邦雄の友人で・・・」と知らない人に説明しても、塚本邦雄さえ知らない人も多し。「まず、歌集を出すことが、第一歩である」とは、目から鱗であった。「それはいい」と、早速、息子のほさきを会長として刊行会を発足させた。

この歌集の編集の過程で、鳥取県歌人会の顧問の北尾勲氏を知り、戦後短歌のことなどをお教えていただいた。北尾氏は、一司の師匠でありその家族が杉原家に疎開していた前川佐美雄の孫弟子である（北尾氏の師匠は、前川の弟子の前登志夫）。また、北尾氏は生前の令子と親交を持っていた。聞いていた。

一司の歌集には、叔母令子の短歌も収録することが出来た。岡村准教授からは戦後文学の観点からの詳細な解説を寄稿いただき、また、「一司の時代を超えた短歌をイメージした」装丁・レイアウトを若手デザイナーの蔵多優美氏に依頼し、とてもいい本が完成した。

刊行会の設立から歌集の完成までを、逐次、日本海新聞の高坂綾奈記者に報道いただいた。また、この歌集や前川書簡集を契機にした資料展を鳥取県立図書館や一司の地元八東図書館で開催した。

これまでの一連の活動を通して一定の「一司の顕彰」がなされたのではと思っている。この度、内田克彦君の悲願の『杉原一司  
塚本邦雄 往復書簡』の刊行となったが、書簡集は非売品であるため、全国の研究者・読者には手に入らないのが残念である。私たちとしては、「何とかして、全国的な出版社からの刊行がなされないか」願うものである。

# 八代日記 (二十五)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

三月某日

入江亜季『北北西に曇と往け』6巻はなかなか出ないが短編集『旅』が発売されていた。パラパラ何ページか覗いたが、さらっと読み通す訳にはいかない。じつくり2時間はかけて読みたい。落ち着いた平靜な時間ができるまで寝かすことにする。ワイフは漫画をさらっと短時間で読めるので「よかったよ」と言っていた。よかったね。

三月某日

長崎書店に立ち寄る。本当に出ていた大友全集。第一回配本分が『童夢』なもので、これを読むには3時間は欲しい。とにかく労働にかまける時間が長すぎて読めない。漫画を短時間で読み切る技術を身につけなければならない。

三月某日

1時間だけワイフに子どもを任せて、部屋に引き籠らせ

てもらい、『つつがない生活』(TMA著、リイド社)を読む。傑作だった。もつとゆつくり読みたかった。つげ義晴マナー(それだけじゃないけれど)を我が物とし、パンク、若者、暮らし、家族、社会、共生、旅、などさまざまな視点や現代的なテーマを優しい筆者の視点から観察し、21世紀の漫画としてまとめ上げている。かつこいいい!そして奥さまとの関係がともうつくしくて涙が出ちゃう。あの感じ忘れちゃってたな。

著者の参加するバンドと、私の参加するバンドと、四日市のアントニオスリー、神戸のサンサンズで対バンしたことがある。場所は今はもうない四日市のガッツユ。あれはいつだったか。その日はとにかく全バンドすばらしかった思い出。ミルクまた観たいな。前著『牛乳配達DIARY』が未読の為、読まねば。

つげ義晴と言えば、仙台でのライブ後の打ち上げの席で、10代、20代、30代の人々がみんなつげを読んでいてすごいことだなあと考えたものだった。自分は25年くらい前の高校生の頃に本屋で文庫本を見つけて読んで衝撃を受けていたが、クラスで読んでる子はいなかったような。でも大学行き始めてから、つげがどうしたとか水木しげるのいいよねとか言える仲間ができたのか。ちくま文庫のつげ義晴コレクション、揃えたいなあ。余裕はない!レコー

ドも長らく買えていないぜ。

三月某日

仕事がなかなか面倒なことになってきたが、もう若くもないので面倒は全部引き受ける。どんとこい。

三月某日

いつもお世話になっているバンド、JAPPERSのボーカルせいや君がロンドンに引越すとのことで、引越し前にケバブジョンソンを呼んでくれてJAPPERSとのツアーマンライブ。場所は下北沢 Livehaus。思いのほかお客さんが来てくれて、大いにダンス。ミツメの nakayaan 氏の DJ も楽しかった。俺はミツメのファン。

赤と紫に光る窓

海辺の宿 海辺の宿

僅かな風にも開くドア

海辺の宿 海辺の宿

日暮れにはぐれた人の顔

海辺の宿 海辺の宿

首輪の外れた犬の声

海辺の宿 宿

あの海辺の宿 宿

日が昇り始める 辺りが変わりだす

灯りと煙に沈む夜

海辺の宿 海辺の宿

浜辺に埋もれた夢の跡

海辺の宿 海辺の宿

私はすっかりうわの空

海辺の宿 海辺の宿

見つめるあいとも歌いだす

海辺の宿 宿

あの海辺の宿 宿

日が昇り始める 辺りが変わりだす

(ケバブジョンソン「海辺の宿」作詞・杉浦真寛)

# ロシアの魂

秦阜 梅林

(楽人)

ダヴィッド・オイストラフ、レオニード・コーガン、エミール・ギレリス、スビャトスラフ・リヒテル：此の4人は「旧ソ連を代表する器楽家」と謳はれた。更に弦楽ではAモグレフスキー、 $\llcorner$ ゴ教師Pストリヤルスキー、Nミルシテイン、イーゴリ・オイストラフ、エリザベッタ・ギレリス、喫出身の名チエリスト、Eフォイアーマン、米国育ち二世のスター、アイザック・スターン、 $\llcorner$ ゴでは早くから外地に出て高名を馳せたV・ホロヴィッツ、S・チエルカフスキー：指揮のAガウク(その門下から多くの名指揮者を輩出した)そしてスウイスやパリで育ち洗練された芸風を聴かせたI・マルケヴィッチ：大半はユダヤ系である此れらの演奏家、所謂「ロシア楽派」を代表する巨匠達は尽く日本の愛楽家には「ロシアの能手」として認識されてゐるが：？

## I

此のリストに「狭ひ意味」で、眞のロシア人が實は一人も居なひ、と云ふと大抵の方には大層な驚きであらう！

何しろホロヴィッツやミルシテイン、オイストラフやギレリスのチャイコフスキーを聴ひて「ロシアの声を聴き、魂の琴線に触れた」と思ひ信じてこられた方は決して少なくないであらうから。

## II

まうお気づきであらうが、此れらの人は皆「ウクライナ人」なのである、(日本の)巷が「知らなひ」を連呼してゐた。：ウクライナが輩出した世界的な有名人はフィギュアスケートやサッカー等のスポーツマン計りでは無ひ。キエフの大門をくぐり、オデッサから船出した彼らは今、爆撃に晒され銃撃に荒らされてゐる彼の地を祖国とする事で繋がつてゐるのである。

## III

このリストから外れるが更に $\llcorner$ ゴの王様J・ハイフェッツはリトアニア、ヴィオラのJ・バシユメットなども多くのウクライナ人と同じやうに早くから中央に上京しアカデミックな教育を受けた地方出身者、圧倒的な人気で指揮者、ピアニストとしても知られるチェロのカリスマ、Mロストロポヴィッチはアゼルバイジャン出身：とくれば(ブリリアントな巧者が多ひことに注目!)「ぢやあいつたい、ロシア人は何処に？居るの」だらう!?



傾向的に演出家や、劇場監督、指揮者に多ひのだ、K. スタニスラフスキー、Aタルコフスキー、Jムラヴィンスキー、G. ロジェストヴエンスキー、V. フェドセイェフ、J. スヴエトリヤールノフ、Dキタエンコ…錚々たる顔ぶれ。広い素養とコネクション、環境も求められる管理職にモスクワやレニングラード（聖ペテルブルク）等都会出身者のインテリゲンチヤーが多ひのは決して偶然では無ひ、そして、我々日本人が「ロシア」だ、「ロシア的だ」と思つて居ることや人等はとりわけ文化芸術面ではウクライナや白ロシア等を包括する「広義ロシア」を指すのだ（そして其れらが渾然一体となつたユニオンだ）と云ふ事がこの演奏家リストからも如実に伺はれるではないか。

bis

かの「鷗」※の第四幕、物語もお終ひ近くにこんな台詞がある。アルカージナ「ハリコフでは大歓迎を受けましてね」中略…（舞台裏からメランコリックなワルツが聴こえてくる）アルカージナ「学生の拍手喝采がすぐく…花の籠が3つ、花輪が2つ…それにほら。」（胸からブローチを外してテーブルに投げ出す）2022' 03' 14  
今回の一冊※

A. チェーホフ「かもめ」沼野充義訳（集英社文庫）

今回の一枚

PI. チャイコフスキー 第六交響曲 口短調

作品74「悲愴」(1893)

○I. マルクヴェイツチ指揮ロンドン交響楽団1962年1月ロンドン Rec

○Dオイストラフ指揮ベルリンフィルハーモニー↓ベurlin, ライヴ1972年3月16日

○D. ミトロポウロス指揮NYフィルハーモニック Rec 1957NY ○J. ムラヴィンスキー指揮レニングラードフィルハーモニー、ライヴ

○Ch. ミュンシユ指揮ポストン交響楽団ポストンライヴ1961年9月29日

○F. フリッチャイ指揮ベルリン放送交響管弦楽団

○L.v. マタチツチ指揮チェコフィルハーモニー



(イラスト・秦阜梅林)

# レターセットと傘

森本 龍哉

(鳥取大学地域学部4回生)

大学の卒業式の様子が夕方のニュースで流れていた。その映像のなかには数時間前にその会場にいた人たちがいて、この映像が流れて私が見ているとき、その人たちはどこで何をしていて、その会場では誰かがまだ何かをしているのか。私は数時間前もここにいて、テレビ画面の向こうの卒業式には出席しなかった。朝から雨が降っていて、4年前に出席した大学の入学式でも雨が降っていた。それから4年のあいだ、雨が降る時間と雨が降らない時間がくりかえされた。

大学1年生のころ、傘が2度なくなつた。大学の附属図書館の自動ドアが開くと右手に傘立てがあり、私はそこに自分の傘を立ててからその奥に向かった。そして数十分ほど滞在したのちに、また自動ドアを抜けて外へ出ようとした。そのとき、傘立てに立てた私の紺色の傘は見当たらな

くなっている。その後、新しい傘を買う。白いビニール傘。私は傘の持ち手の白に油性ペンの黒で自分の名前を書いておくことにした。

それからしばらくして体育館で体育の授業があった。雨が降っていて、私はその傘を体育館の出入り口の傘立てに立てる。私と同じようなビニール傘が多くを占めていた。授業が終わると更衣室で着替えを済ませ、体育館をあとにする。そのとき、傘立てに立てた私の名前は見当たらなくなっている。そこにいた全員がそれぞれに傘を開いてどこかに歩いていったあと、私は体育館の外壁を背にして立っていた。私の頭上は屋根で覆われていて、強く降りつづける雨の音を聞く。誰もいなくなつたあとでも、傘立てには何本もの傘が立てられたままだつた。忘れられた傘たち、取り残された私。あれだけわかりやすく名前を傘に書いたのだから、きっとその人はまちがえたにちがいないと私は思い、誰かが「すみません、傘をまちがえました」と小走りに戻ってくるのを待っていた。ちょうど昼休憩の時間になっていたため、急いで次の授業に移動しなければならぬというわけでもなく、私は私の傘が戻ってくるのを待った。しかし誰も戻ってこなかった。私はあきらめてリュックサックのなかから黒い折りたたみ傘を取りだし、雨のなかを歩きはじめる。図書館でのそれも体育館でのそれ

も、どちらも同じ夏の出来事だった。そしてそれからの私は傘をなくすことなく、大学を卒業した。結局、レターセットは開封しないままだった。

卒業する1ヶ月ほど前、私はレターセットを買った。でも買ったままで開けられずに自室の机の上に置いていた。何度か下書きをノートに書いてみるが、ありふれた表層的な印象しか得られず、レターセットから便箋を取りだすことはしない。ちょうど人数分の封筒も。同じ研究室で学んだ人たちに私は手紙を書こうと思っていた。でも思っているだけで、レターセットを買っただけで、下書きを書きつけているだけで、卒業式は終わっていた。そんな1ヶ月だった。レターセットの袋のなかの便箋と封筒、そのにおいや肌ざわりを知らないままの私は数十秒の卒業式が映るテレビ画面を見ていて、そこにいる人たちが身にまとう香りがどのような感情をもたらすのか、写真を撮るときにシャッター音がどのように届いてくるのか、わからなかった。そこで立ちのぼる黒煙のにおいや爆撃音がどのように迫ってくるのかも、わからない。

映像のなかには数時間前にそこにいた人たちがいて、私とその映像を見ているときも、その人たちはどこかで何かをしている。私がニュースを見ている金曜日の夜、そのときそこは金曜日の昼で、卒業式で誰かが涙を流していると

きも、戦場となったそこで涙を流している誰かがいる。私は未開封のレターセットを食器棚のなかにしまうことにした。その食器棚を私は本棚として使っている。そして現在の私は紺色の傘を使っているが、自分の名前はどこにも書いていない。この文章を書きながら私は、閉じられたカーテンと窓の向こうにサッカーボールのようなものが虚しく地面に跳ねる音を聞いている。誰かが何かを話している。

# 春、来たる

三浦 永理

(青翔開智中学校教員)

春になると切ない。あの時の旅立ちを、あの時の「はじめまして」を、春のあたたかな空気を吸い込んで、前を向こうとしていた希望の瞬間を思い出すから。

三度目のワクチン接種を終えて、副反応がやっと落ち着いていた朝、一番最初に目に入ったのは、祖母が亡くなったという母からの速報だった。その二日前、電話越しに会話したばかりで、「持病もあって、危うい」と聞かされてはいたものの、まさかというのが一番の思いであった。そんな祖母は「便利な世の中ね、遠くにいてもこうやって顔をみれるしね」と二度も三度も言った後、「それでいつ帰ってくるの？」と二度も三度も聞かれたのだが、その時の自分はその週末に帰省する羽目になっていることなど、予想だにしなかった。

東京というのは、火葬場が本当に取れないらしい。火曜の朝にはそのような状況になっていた祖母だが、葬儀は土

曜日となった。「無理して帰らなくてもいいのよ」と母は何度も言うが、勝手に帰る気満々になっていたこちらも、週の残りは心ここにあらずだった。

小さな頃から、東京に「帰る」時には、この祖母と祖父に会うものだった。小学生時代、関西の家に帰るときは、私も弟も、儀式のようにいつも大泣きしていた。いつも祖母に抱きしめられて、泣いていた。新幹線が出る時もとりあえず泣いていた。迷惑な子供である。

この一、二年、耳が遠くなってからと言うもの、母達にとっては厳しかったこの祖母も、丸くなっていった。

「多分、今日、おばあちゃん、若返った気でいて、自分の父親を介護している気でいたわ。『みんなで集まって、ご飯食べましょうよ』って言ってるよ。まあ、元氣ってことよ。」

そんなことを母が話していたのがほんの数日前。そうか、みんなで集まるってこのことだったのか。

祖父母の家は、私の大学に近い。(すなわち、祖父の行った大学に近い。)

その地下鉄の駅が子供の頃は薄暗く、怖かった。どここ

までも高く感じる天井。大きな音を立てて入ってくる車両が起こす風によって、線路に振り落とされそうな気持ちになる。祖母の手を握ってやっと歩くことができた。

ただ、大学に入って再び同じ駅に来たとき、ホームの端から端まで何も思わずに前を向いて歩くことができるようになっていた。大人になってしまった。

そんな風な駅まで歩いていくことなんて、当たり前前にできるようなったのに、あるとき、祖母が私のことをその駅まで送ってくれた。一緒に歩く祖母が小さくなったように感じる。昔は道を横切るにも、祖母が手を握って走らなければ、渡りきれなかったのに。あの日も確か晴れていた。春の日だった。

金曜日、仕事終わりに急いで飛行機に飛び乗り、あっという間に大都会のど真ん中までやってきた。あんなに帰りたい、とても遠いと感じていたこの場所も、同じ国の街だったと気付かされる。

礼服を母親がホテルまで届けてくれ、父は普段の調子と変わらない生活を送っていること、祖父は六十年も連れ添った相手を急に亡くして流石にしよんぼりしていることを伝えられる。

晩御飯も食べる暇がないまま移動していたからと、母が差し入れをくれた。差し入れの苺は丁寧なヘタをとってあって、爪楊枝まで入れてあった。私もいつもこうしなくちやいけないと思う。

葬式の日、上着がいらなくらいあたたかい春の日。久しぶりに従姉妹と会う。相変わらず、よく笑う。お互い様かもしれない。

一番小さな参列者は、母のはとこの息子達だった。タブレットはお預けで、空いている時間、ずっと本を読んでいた。見よう見真似で、お焼香をあげている。

ここの兄弟の一番上がうちの弟と同じ名前だった。あるとき、祖母の家に、この兄弟がきて、帰ろうとすると、

「もう関西に帰っちゃうの？」

と祖母は寂しそうに言っていたらしい。

寂しかったのは、私たちだけではなかったのですね。

春になると切ない。何度も何度もさよならと手を振っている。それだけでは足りない。

あきの素生

(くうねるめがね)



子どもの頃、海で小さなたこ出会い、みたいなエピソードはない。海に潜って、いきものを見るのが好きだった。たこを見たことがあっただろうか。一緒に行った友人が、たこを見た、岩場に張り付いて擬態を頑張ってるふうだった、ばればれだったけど、と報告してくれた記憶がある。思い浮かぶのは、そのとき想像したたこの姿か、実際に自分でも目にしたのだったか。すでにたこのおいしさに目覚めていたので、そんなごちそうが身近に、とわくわくしたものだ(たこよすまない)。ちなみに、たこを勝手にとるのはよくないことかもしれないので、まずは調べてみたほうがよいような気がします。

先頃見つけた旨そうな生だこの刺身は、レモン汁をかけて食べた。たこの刺身には、ほんのり塩味が残っている。そのまま食べるのも好きだが、レモンの酸味が、たこの

風味と食感を引き立てる。

たこについて書き始めて思い出したが、たこにかけるお気に入りのドレッシングがあった。鍋で温めたぼん酢にスライスしたんにくを入れて、少し煮立たせる。そこにサラダ油をいれて完成。とても簡単だ。油はオリーブオイルでもいいかもしれない。ちぎったレタスの上に、ぶつ切りにしたたこをのせて、まだ熱いドレッシングをまわしかける。んにくの香りが立って、食欲をそそる。ぼん酢が香ばしさをはらんで濃さを増し、油に沈む。何にかけてもよさそうだが、たこにしつくりくる味だ。

それはさておき、たこの塩味は、海中生活の名残だろうか、と想像していた。旬真っただ中のめかぶやわかめも塩味があり、レモン汁や酢だけでいただく。海水のしょっぱさを思えば充分あり得る話だ、とこの推理には自信を持っていたが、よくよく考えたら(いや、よく考えなくても)魚の刺身に塩味は感じられない。穴だらけの推理であった。

たこの塩味がどこから来るのかわかったのは、ここ二、三年のことだ。下処理のされていない魚(など)を買うことはほぼない。年に一度あれば上出来。さっと魚が捌

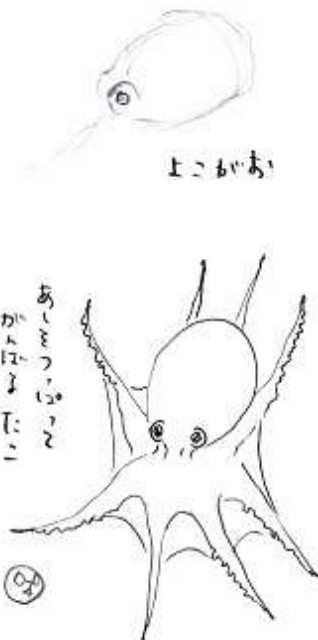
ける大人になりたいものだが、手に合わない。次の日が休みとか、燃えるごみの日が近いとか、何より魚を捌く気力体力が残っていて、どうしても食べたい魚があるときだけ、重い腰を上げることができる。諸々の条件が揃ったとき、三杯いくらで生だこが売ってあった。あんまりおいしそうで、三杯分もたこが食べられる、と飛びついたのである。

とはいえ、生だこの処理の仕方は知らない。ネットでレシピサイトや動画をいくつか見て、思った以上に手間がかかるかわかった。ぬめりを取るために、たこを塩で揉む。流水で洗い、また塩で揉む。ぬめりが取れるまで繰り返す。あまり長い時間塩揉みすると塩辛くなりすぎるので、一回の塩揉みは短時間で済ませなければならない、と書いてあるサイトもある。つまり、その分、回数をこなすことが必要なのかもしれない。動画では、たこのぬめりは後から後から湧いて出るようだった。少し後悔した。冷凍すると簡単にぬめりが取れるという情報に光明を見出したが、すぐに食べたかったので、二杯は冷凍して、一杯塩揉みしてみることにした。

食べない部分を取り除いてから、たこの入ったボウルに塩を入れてくるくる混ぜると、泡立ってくる。足までしっかりぬめりを取って、水で流す。もう一度塩を入れて混ぜると、また泡立ってくる。さつきとあまり変わらないよう

にも見える。暗澹たる気持ちで、足までしつかり、でも、時間をかけ過ぎずに、と作業を続ける。ぬめりがすっかり取れた、という達成感に覚えがない。まあこのくらいで、済ませてしまったのかもしれない。

日本茶で茹でると身が柔らかくなる、と、昔まんがで読んだ気がしたが、たこのことか他の海産物の話か定かでないだったので、とりあえず塩茹でした。塩揉みもしてるし、こうやって、たこに塩味がついてゆくのだな、と学んだ。余談だが、後日、冷凍したたこの下処理をした。たいそう楽だった。次があれば少し食い意地をおさめたいと思う。



(イラスト・あきの素生)

# 魔法のない指

ドラマメリア

(座敷わらし)



植物が多すぎる。自宅ではなく職場の話。入口付近から本棚の隣、パソコンの脇、奥の窓際……と至るところ観葉植物の鉢植えだらけなのだ。大きさも掌に収まるミニサイズからわたしの背丈を超えるものまで様々で、教えてみると実に二六あつた。

この鉢植えたちの持ち主はわたしではなく、栽培の趣味はない。比較的手がかからない品種ばかりとは言っても、物言わぬ緑は育てるのが難しい。きちんと世話をしているつもりでも、ふと気がつけばしおれていて、ぱらぱらと葉を落としてしまったりする。あれが足りない、こうして欲しいと鳴いて訴えてくれる動物の方がわかりやすく安心できる。以前の職場は名前のおり緑あふれる場所だったのだが、栽培下手のわたしは引き継いだ鉢植えをすべて枯らしてしまい、生徒に「ここ、植物のお墓なんですわ」と言われたものだ。

それ以来得意でないことには手を出すまいと思い、二年間ほとんどかまわってこなかったのだが、この春を前に少し

心を入れ替えてみることにした。何かこれといったきっかけがあつたわけではない。しいて言うなら、聞こえない声に耳を澄ませることも大事だと思つた一年だったから、かもしれない。自分のことも、周りのことも。頭かになつていないものにも気を配ることの大切さを学んだ年だった。モリス・ドリユオン作『みどりのゆび』の主人公チト少年の指には、植物を芽吹かせ花を咲かせるふしぎな力が宿つているという。園芸家が欲しがるその指をわたしは持つておらず、指は緑ではない。いや黄緑も難しそう。でも、ぐつと緑みを減らして黄……あるいは橙ぐらいなら、可能かもしれない。だいたいゆび。それつてただの素手かもしれないけれど。



・編集後記：

気がつけばまた桜の時期。SHR以外にも、一口には言えない初体験も公私ともにあり、記念的な、忘れがたい一年だったように思います。

ドラマメリア (編集長)

本屋近くの袋川土手にサクラが開花。花見で往来は賑わいますが、例年いつも、店内は静か。やはり「本より花」なのでしょね。

奈良敏行 (発行人)